



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1981 精道教育促進協会(音風)三・三四五二 芦屋市船戸町12-6

教皇様の叢

待降節について

「来たるべき方はあなたですか。それともほかの方を待つべきでしょうか。(マテオ11:3) (待降節第三主日の本日) 教会は、洗礼者ヨハネの弟子がキリストにたずねたときの言葉を繰り返します。「来たるべき方はあなたですか。」

これは、生涯をかけて救い主の来臨を準備した人、つまり、牢や死をもとめせずに、主を愛し主の来臨にすべてを備えた人の弟子がキリストに投げかけた質問です。その弟子たちが質問をしている頃、ヨハネは牢に入れられており、二度とそこから出ることはないことになっていました。

そこでキリストはご自分のみわざとおことばとで答えると共に、イザヤ預言者を引き合いにだされます。

「盲人は見え、足の不自由な人は歩き、ら病の人は清くなり、耳の聞こえない人は聞かされ、死者は生き返り、貧しい人には福音が告げられている。(…)帰って、あなたたちが見たり聞いたりしたこと、ヨハネに告げなさい。(マテオ11:5と4)

待降節の典礼の中心がキリストにされたこの質問であり、それに対する主のお答えなのです。

この問いかけは一度きりのものではしたが、私たちはいつでも繰り返すことができます。というよりは、何度もうりかえされるべき質問であり、事実、そうされています。

人はキリストについてたずねます。世界中の人々、世界中の国々や大陸、異なる文化、文明に属する人々がたえずキリストについてたずねているのです。過去、現在を問わず、キリストについて黙想しよう、黙想させよう、あるいは、キリストの存在と使命を認めず、それらを小さくしたり、ゆがめたりするために、多くのことがなされています。しかし、それにもかかわらず、キリストは一体どなたなのか、という問いは何度も何度も繰り返されていくのです。もうそのような問いかけは根こそぎにされてしまったと思えるようになってくるのです。

人々はたずねます。「あなたは来たるべき

キリストですか。「私の人間性の決定的な意味をお教えくださるのには、あなたですか。」「生きる目的を説明してくださいませんか?」あなたは、私が人間としての生き方を基礎から立ち立てることができるようにしてくださいませんか?」

以上はいずれも人々がたずねること、そしてキリストはそれに答えてくださいます。キリストはいつも、ヨハネの弟子になされたときと同じ答えをお与えになります。これは待降節中の問いかけですから、私たちもくりかえさねばなりません。

私にとってキリストとはどのような御方なのだろうか。

私の思いと心、行ないに関してキリストは一体どのような存在なのだろうか。

キリスト者であり、キリストを信じる私はどうすればキリストを知ることができるのだろうか。私の信仰告白の中味であるキリストを知るように心がけているだろうか。

キリストについて、人々に話しているだろうか。

私の家庭、仕事場、大学、私の生き方とふるまいのなかに、少なくとも身近にいる人にキリストを証しする努力があるのか。これはまさに、待降節にふさわしい問いかけであると言えます。この問いかけを基礎としてその他の質問にこたえてみなければなりません。それは私たちのキリスト者としての自覚を深め、主の来臨に備えるのに役立つからです。

いろいろな意味の待降節

待降節は毎年めぐってきて四週間つづき、クリスマスよろこびに道を譲ります。ですからいろいろな意味の待降節があります。

無邪気な子供たちと落ちつきのない若者の待降節。婚約者たちの待降節。結婚した人々、親となった人々、あらゆる仕事と責任を負

っている人々の待降節。そして、老人、病人、苦しむ人、見捨てられた人々の待降節。(…)以上のように色々な待降節は毎年巡ってきますが、つねに、同じ点を見つめ、同じ点を目標としています。ヤコボの言葉に耳を傾けてみましょう。「兄弟たちよ、主が来られるまで忍耐せよ。見よ、農夫は地の尊い実を、秋と春との雨がくるまで忍耐して待つ。あなたたちも忍耐し、心を固めよ。主が来られるのは近い。」ヤコボは続けて「みよ、審判者は門の前に立っておられる。(ヤコボ5:7-9)と警告しています。」

色々な待降節は収穫を待つのに似ています。農夫たちは一年間、もしくは数ヶ月間稔りを待ちつづけます。ところで人間の生命の収穫は一生の間待ち続けるものです。どの待降節も大切です。地上の収穫は繰り返すに繰り返されます。私たちの必要を充たすためです。人間生命の収穫は、赤裸々な真実の姿で、神そして、審判者であるキリストのみ前に立つときまで待たねばなりません。

キリストの来臨、つまりキリストがベトレヘムへおいでになることは、つまりこの審判を告げ知らせることもなります。その結果、一生の間に何度も待降節を迎えるうちに、いかにして成熟するか、いかにして成熟すべきかを教えるべく、

(今日の)福音書によると、集った群衆の前にキリストは洗礼者ヨハネについて次のようにおおせになりました。「あなたがたによく言っておく、女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネよりも偉大なものは現われなかつた。しかし、天の国のいと小さき者でも、ヨハネよりも偉大である。(マテオ11:11)

愛するみなさん、私の望みは、私たちの最終的な運命をお告げになるキリストから、この(ヨハネに対する)ような言葉を聞くことでありませぬ。(…)

主の来臨を迎えるために共同体のなかではどのような準備ができていますか。来臨はどのような形で受け入れられるべきなのでしょう。これに対する答には二通りが考えられるでしょう。

真近なでき事として考えれば、待降節中の教会の教えに従いつつ準備をすべきである、つまり、いと清き聖母の胎内で肉体となり給うた神の御子の秘義、永遠の神秘をよく黙想し、改心への勧めに応じることである、と言えるでしょう。

五カ月ぶり、聖ペトロ広場で

今日になってやっと、ローマ司教の大切な仕事になっていながら、永らく中断していた一般謁見再開がゆるされました。

この前に大勢の巡礼者の方々がローマに集ったのは五月十三日のことでした。それ以後きょうまで集うことのできなかつたわけはみなさんすでにご承知です。

五カ月ぶりに、私たちがこよなく愛するこの集い始めるにあたり、五月十三日に触れぬわけにはゆきませぬ。(…)

私、教皇の感謝

「主のいつくしみは絶えることがない。」(哀歌3・22)

これは、神の救いのみわざに感謝の心を表わし、神のあわれみを称える神の民のことばです。

本日わたしは、水曜日の謁見に集ってくださったみなさん方の前で、この聖書のことばを繰り返したいと思えます。これらの言葉が

降誕節をより深い信仰の心で生きること、そして、カテケージス、とくに典礼および秘跡のうち現存なされるキリスト、つまり、つねに迎えるキリストの来臨を深い信仰で生きるということになります。

みなさん方の小教区ではこれが司牧の基本線になっていっていると思います。事実、年齢に応じた要理教育が行なわれ、とくに聖なる典礼に重きがおかれていることでしょう。まさに秘跡を重要視する生活こそ、深い理解のうちになされるキリスト宣言とあいまって、私たちがキリストに近づくために一番てっとり早く

五月十三日、そして、教皇襲撃のため取り止めにあった一般謁見の残響になればと念じています。

ジュメリ総合病院に入院する間に、エルサレムの初代教会で起り、使徒行録に記されてあるエピソードが幾度となく私の頭に浮んできました。ヘロデはペトロを逮捕します。それは種なしパンの祭の頃であった。ペトロを捕えて牢に入れ、四人組の兵四組に守らせておいた。逾越祭が終れば、ペトロを人々の前にひきだすつもりだった。こうして牢に入れられたペトロのために、教会はたえず神に祈り続けていた。(使徒行録12・3-5)

「ヘロデがペトロを引きだそうと思っていた日の前夜、二つの鎖につながれたペトロは二人の兵士の間に寝ていた。牢の門は番兵たちが警戒していた。すると突然、主の天使があらわれて、獄内は光に輝いた。天使が、ペトロの脇腹を叩いて起してから『早く起きなさい』と言うと、鎖は手からはずれた。『帯

い道であります。私たちは、祈りに、とくに日曜のミサ聖祭にキリストとの出会いの場をもつことができます。よく考えてみれば、ごミサに与るとは、主の来臨を毎週くりかえすことなのです。ミサ聖祭に与らなければ、このような自覚をもつ機会がなくなり、そのために自覚そのものが弱められ、いずれは消えてしまってしまう。というわけで私は日曜のミサ聖祭の大切さを第二ヴァチカン公会議のことばで強調したいのです。ミサ聖祭は非常に大切な祝いであって、信者の信仰心に植えつけられねばならない。信者は日曜日になる

をしても、はきものはきなさい。』と天使が言ったので、そうした。天使はふたたび『私についておいで』と言った。ペトロは出かけて天使について行った。ペトロは、天使がしたことは現実ではない、夢を見ているのではないかと考えていた。第一、第二の番所をすぎ、町に入る鉄の門に着くと、自然にいた。彼は姿を消した。それから我にかえったペトロは、『私はいまこそ、主が本当に天使を送って、ヘロデの手から、そしてユダヤ人が期待していたことから、私を救い出してください。』とわかった。』(使徒行録12・6-11)

入院中は、エルサレムの初代教会で起ったこの事件を何度も思い出しました。当時と今とは事情は大変こととなりますが、ペトロのあとを継いでローマ司教の座につく私は、『いまこそ、主が本当に天使を送って、ヘロデの手から、そして(…)人々が期待していたことから、私を救い出してください。』とわかった。』(使徒行録12・6-11)

私が使徒行録に残されたこの章を引用したのは、そこに次のような箇所があり、私の大きな支えになったからでもあります。『こう

とひとつのところに集い、神のみことばに耳を傾けてご聖体にあずからなければならぬ。(『典礼憲章』106参照)(…)

あなたがたの神がおいでになる

待降節についての黙想をイザヤ預言者のことばで結びたいと思います。

「疲れた手を強め、ふるえるひざをかたくせよ。心のなえた人に言え、元気をだせ、恐れな、あなたがたの神をみよ。(…)神はあなたがたを救いにこられる。(イザヤ35・3-4) (一九八〇・十二・十四)

して牢に入れられたペトロのために教会はたえず神に祈り続けていた。(使徒行録12・5)

みなさん、私はペトロに似た体験をしました。閉じこめられ、死を待っていたペトロと同じように、教会の祈りの力がいかに効果のあるものかわかったのです。中断せざるを得なかった一般謁見に集った人々の祈りはその場で感じました。ニュースが広がるにつれて、五月十三日当日の人々の祈りを身を感じました。ニュースを聞いて、世界中のあらゆるところから、たくさんの方々が、国家元首から、反響が届きました。とくに、あのニュースは人々が一つになって祈るといふかけになったのです。司教座聖堂、小教区の教会は人であふれ、オーソドックス、プロテスタントの方々、さらに、モーゼやマホメットにつき従う人々、その他大勢の人々が一緒に祈ってくださいました。

このように考えると、五月十三日に集い祈りをささげてくださった方々、そして、そののちずっと辛抱強く祈り続けてくださった方々に対して、心からの感謝の意を表したく思う私の心を察してくださることがおできになるでしょう。兄弟姉妹であるみなさん方への感謝の心は、主キリストと聖霊にも向かいます。あの事件を契機に大勢の人々が心を一つに

説教・講話・書簡等の抄記

して祈るよう働きかけてくださったからです。このように心のこもった祈りを思うと、我知らず使徒行録のことばを思い出します。「こうして牢に入れられたペトロのために、教会はたえず神に祈り続けていた。(使徒行録12・5)

大きな負い目

「私は皆に負うところ大である。(ローマー1・14)

「助けを求めるすべての人、真心から祈る人のそばに、神はおられる。(詩篇145・18)

いつもの日曜日のように共に告げの祈りを唱えるために集う今、本日の典礼に現われる詩篇の言葉を思い出します。私は聖ペトロ

広場に集まったみなさん、ラジオやテレビを通じて私たちと一致しているすべての人々と共に告げの祈りを唱えます。

今日も病院からこの祈りを先導しますが、この祈りはいつもと同じ主の面前における私たちの交わりの表われです。私たちがどれほど主の身近にいるかを表わしているのです。本日に「助けを求めるすべての人、心から祈る人のそばに、主はおられ」ます。

わたしたちは、神様に近づくために、ここにいます。神様が身近にいらしてください。神様が身近にいらしてください。祈りによって、私たちが神に近づき、神は私たちに近づいて下さるのです。

ナザレトのマリアはこのことをわかりやすく、それでいて完全に教えてくださいます。お告げの祈りのためにこうして集うとき、単に言葉を口にするだけではなく、心の中で再びあの場面を「体験」します。この祈りは、あの名伏しがたい瞬間に永遠のみことばの母となる召命を大天使ガブリエルの口から知らされたとき、乙女マリア

神様に近づく道を 聖母マリアから学ぼう

14) みなさんには以前にも増して多くを負うことになりました。直接私の命を救うために尽力して下さった方々、健康回復のために手を貸して下さった方々、ジェメリ病院スタッフの方々に、本当にお世話になりました。同じように、祈りに次ぐ祈りで私をつんで下さった方々すべてに心からお礼を申し上げます。

が神に話しかけたことばなのです。

あの瞬間、あのご託身の神祕の瞬間ほど、神が人間に近づかれ、また人間が神に近づいたことはありません。

ですから、お告げの祈りを唱えるとき、神がいかに私たちの身近におられるかをマリアさまに教えていただくのです。

「助けを求めるすべての人、心から祈る人のそばに主はおられる」ということを学ぶのです。

いつでも、どこにいても、決して神のおそばから離れてしまうことのないように、祈らなければなりません。祝日であっても、日常生活においても、仕事をしているときでも、休んでいるときでも、喜んでいたりするときでも、苦しんでいるときでも、また病気のときでも、あっても、神の身近にいらしてください。愛するみなさん(…)それぞれ、色々な状況のもとにあります。みなさんが心から祈り、主のおそばにいらすることに気づきますように。みなさんの毎日から決して、祈りが消えてしまうことのあるまいにちように。神のそばにいて、神との関係を深める泉が決して涸れてしまうことのあるまいにちように。

この願いを、わたしたちとすべての人々のために、今日のお告げの祈りでマリアさまにお願いしましょう。(一九八一・八・二)

私はまた、聖母マリア、すべての保護の聖人のおかげもこう祈りました。聖ペトロ広場での出来事はちょうど、ポルトガルのファチマで六十年前に貧しい牧者の子どもたちに主キリストの御母が姿をお現わしになったのと同じ日、同じ時刻であったことを忘れることはできません。あの日に何につけても、御母の優しい御手を感じました。それは致命的

とも言える弾丸よりも強かったのです。本日は、ロザリオの聖母の記念日であります。みなさんにお会いすることが許される迄ほぼ五ヵ月もかかりました。私は五ヵ月ぶりの言葉を感じと愛のことばにしたいと思いましたが、ちょうど、聖なるロザリオが感謝と愛と心からの祈願、教会の御母への祈りであるように。(一九八一・十・七)

公会議の真正な解釈

「公会議後」のこの時期に、第二バチカン公会議について真正な教導職に適合しないことしやかな解釈が、かなり強力に押し進められたことは周知の事実です。私はもともと著名な二つの傾向、つまり「進歩主義」と「完全主義」に触れたいと思います。ある人たちは、信仰の内容、キリスト教倫理、教会の組織を、人々の考え方の変化や世の要請に適合させようと懸命になっています。そういう人たちは、何を信頼すればよいのかわからなくなつた信者の人々のみではなく、すでに決定

とも働いておられるという真実を受け入れない人々なのです。これらの事実、教会史上起った同じような現象を考えると、何も奇異なことではありません。しかし、だからといって正しいつまり、真正正銘の解釈をするために全精力を傾ける必要性がなくなるわけではありませ

ずみの信仰の本質的な点や教会の根本、あるいは、忠実・一致・普遍性を保つに必要な諸規定などを充分に考慮してはいけません。是非でも進歩しなければならぬと必死になつているのですが、一体どういう「進歩」を目ざしているのでしょうか。他方、私たちこそ第一に悪用や濫用を非難したり修正したりする役目をもつわけですが、その悪用や濫用を指摘し、教会の特定の時代に留まる態度をかたくなに守ったり、あるいは、ある神学的公式や典礼上の表現の定式を絶対的なものとする人々もいます。その人たちは、深い意味を悟らず、歴史全体を考えず、正当な発展に目もくれず、新たにでてくる問題に対処す

た分業をもたらし、それは相互に陰口をきき合つてあらゆる所で不和をかもし出します。このような態度や批判の中で、真実の刷新のために非常に有用な多くのエネルギーが浪費されているのです。寛大さや信仰を欠くことのないこのような人々が、その牧者たちとともに兄弟間のこの対立を克服することを謙遜に学び、そして公会議の真正な解釈を受け入れてくれるよう——これこそ根本問題なのです——また司牧上の必要の感じ方がいろいろ異なるなかで教会の使命をともに担っていくことができることを希望したいと思います。(フランス司教団へ)

不変の教え

クリスマス「贈りもの」

聖ペトロ大寺院にて、クリスマスの深夜ミサの説教(一九八〇)

ローマの聖ペトロ大寺院に集まられたみなさん、そして世界のどこにいても、わたしのことを聞いてくださっているみなさん、キリストのしもべ、神の奥義の管理者(コリント前4・1参照)であるわたしは今、ペトレム(ペトロ)の夜の使者としてみなさん方に話しています。(…)

アダムの子、わたしたちの信仰の父アブラハムの子孫、ダヴィドの家系の処女マリアよりお生まれになった神の子イエズス・キリストの誕生の夜です。御父と同じ実体の神の子が人としてこの世に降られたのです。

夜も深まりました。
「やみをあゆむ民は、大いなる光をみた。やみにつつまれた地に住むものに、光がかがやいた。(イザヤ9・1)これは預言者イザヤのことばです。

ペトレム(ペトロ)の夜、このことばはどのような現実されたのでしょうか。ユダの地とその辺りを暗闇が包む。ただひとつところにのみ、光輝いている。光はひとにぎりの純朴な人々だけに届いた。その地方で「夜、羊のむれの番をする」(ルカ2・8)羊飼いたちには。

その夜、イザヤの預言は彼らにだけ成就したのです。彼らは、大いなる光を見た。「主の栄光があたりをてらし、かれらは大いにおそれた」(ルカ2・9)

この光は、まぶしくて彼らの目をくらませましたが、彼らの心を照らしました。彼らは

もう知っているのです。「今日、ダヴィドの町で、あなたたちのために、救い主がお生まれになった」(ルカ2・11)ことを。

羊飼いたちが、最初に知っていたのです。今日、世界中の何百万という人々がこのことを知っています。ペトレム(ペトロ)の夜の光は大勢の人々の心に届きました。しかしまだ、闇も残っています。ときには、この闇が、もっと深くなるようにさえ見えるのです……。

キリストのしもべ、神の奥義の管理者であるわたしは、この夜の光に共に与るみなさんと、こう祈る他ありません。この光が、どこにも届きますように、そしてすべての心に入口を見つめますように、消えてしまったかのように見えるところに、この光が戻りますように。

どうか、もう一度、新しく火がともされまますように。ちょうど、ペトレム(ペトロ)に近い野原で光が羊飼いたちの目を覚ましてくださったときのように。

「あなたは、よろこびをふやし、うれしさを増された」(イザヤ9・2)

その夜主を受け入れた者は大いなる喜びを得ました。光が与える喜びです。世の暗闇は神のご誕生の光におおいかくされてしまったのです。今のところ、ごく少数の人々しかこの光に与らなくてもよいのです。この人々の中には、ペトレム(ペトロ)で「旅館にへやがなかったから」(ルカ2・7)家の中で御子を生むこ

とのできなかった処女マリアとその夫、また町に近い野原で大いなる光に照らされた羊飼いたちがいました。

あの最初の夜、神のご誕生の夜に、この出来事のもたらす喜びは、ごくわずかの羊飼いに届いただけですが、かまわないのです。一向にかまわないのです。

そのよろこびは全ての人々に届くように定められていますから、人類全体の人間のレベルを超える喜びです。人となられた神の御子において、人間が神の子として受け入れられたのです。これ以上善いことより、これ以上大きな喜びがあり得ましようか。

これは宇宙的な喜びと言えるでしょう。全被造界、神に創造され、罪のために神から遠く離れてしまった世界全体を満ちします。そして今、人間となった神の誕生によって、ふたたび、神のもとにもどされたのです。宇宙全体の喜びなのです。

造られた世界全体は今夜ふたたび天からのことばでの訪問をうけて、喜びをわかちあうことができるのです。

「いと高き所には神に栄光、地には善意の人々に平和」(ルカ2・14)

今夜、わたしは特に、苦しんでいる人々のそばにいたいと思ひます。そしてまた、地震に出会った人々のそばにいたいのです。戦争や暴力の恐怖のうちにいる人々のそばにも。

この主のご誕生の深夜ミサに与る喜びを奪われてしまった人々のそばにも、また、苦しみの床にくぎづけにされている人々のそばにも、そして、絶望に陥ったり、生きる価値やすべてのことの意味を疑うようになってしまった人々のそばにも。

あなたたちみんなのそばにいたいのです。この喜びは、特にみなさん方のためなのです。

す。ペトレム(ペトロ)の羊飼いたちの心を満ちしたこの喜びはとくにみなさん方のものであります。この喜びは、神の喜ばれる人々つまり、正義に飢えかわく人々、涙を流す人々、正義のために迫害に苦しむ人々の喜びだからです。預言者のことばが、みなさんにおいて実現されますように。

「あなたはよろこびをふやし、うれしさを増された」(イザヤ9・2)

「かれらはみ前でよろこんだ、刈り入れの時のように」(イザヤ9・2)

これも預言者イザヤのことばです。ごらんない、労働で日々の糧を得る人々。空手で初子のみ前に来ないでください。彼らは空手で来ません。

贈りものをもってくるのです。神の贈りものをうければ贈りものをもってお返ししなければなりません。聖ペトロ大寺院に集まる親愛なるみなさん、さらに、世界のどこにいても今わたしのことばを聞いてくださっているみなさん、今夜、人類は贈りものの中の贈りものを受けました。今夜、すべての人間はもっとも偉大な贈りものを受けました。神ご自身が人間のために贈りものとなられるのです。人間のために、神がご自分を「贈りもの」にされるのです。神から人へ伝えられることばとしてだけでなく、肉体となられたことばとして、人間の歴史にお入りになったのです。

みなさんにおたずねします。この「贈りもの」に気づいているでしょうか。

「贈りもの」に贈りものをもって応える覚悟ができていますか。あのペトレム(ペトロ)の羊飼いたちが、ほんとうに「贈りもの」に……。ペトレム(ペトロ)でこの新しい夜の深みから、みなさん方が人となられた神の贈りものを受けられることができますように。

みなさんが、「贈りもの」には贈りものをもって応えることができるように強く望みながら。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円 一年予約七百二十円送料七百二十円 二十部以上一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 072393